走り読み文学探訪リバイバル(その37)

「ハンニバル」　トマス･ハリス　　訳　高見浩

紹介者：榎本博康

［紹介］

ボルティモア精神異常犯罪者用州立病院に幽閉されていたハンニバル･レクター博士は、血みどろの逃亡から7年、以来全く姿を隠していた。一方、当時博士の示唆で連続殺人犯バッファロー･ビルを割り出して射殺したＦＢＩ特別捜査官クラリス･スターリングは32歳に。麻薬密売組織のアジトを急襲し､銃撃戦の末に女首謀者のイヴェルダを射殺するが､彼女が自分の赤ん坊を抱いて死ぬ姿をタブロイド紙などに大きく報じられた。ＦＢＩの強引な捜査に対する批判をかわすため､クラリスは責任をとらされそうになる。落ち込んでいる彼女に、レクター博士からの癒しの手紙が届く。「敵は死に、赤子は救われた。君は戦士だ」と。

食肉加工会社社長のメイスンは、昔レクターにそそのかされて自分の顔の肉を犬に食わせる愚行により、今は豪邸の専用ベッドで人工呼吸器の助けを借りて生命を維持しているが、強烈な復習の執念に燃えて、財力を利用して情報を収集し、レクターを追い続けていた。

ついにレクターはイタリアのフィレンツェで、ダンテの「地獄編」などの専門家であるフェル博士として潜んでいる所を発見された。積年の恨みを晴らすために、博士を生け捕りにすべく派遣されたメイスンの手下の手を逃れて、団体観光客にまぎれてアメリカに戻る。ドイツ人の邸宅を借りたハンニバルは、自分の高尚な嗜好を満足させる生活を始める。

一方クラリスは、彼女の活躍を快く思わない司法省のクレンドラーによって、レクター博士の逃亡を助けるために捜査情報を漏らした、との濡れ衣で捜査官の権利を剥奪される。そんな彼女の誕生日が近づく。レクターはその祝いに彼女の誕生年のワインを、彼女の愛車、マスタングの中に置こうとする所を、メイスンの手下に拉致される。

［感想］

2000年の春、書店のベストセラー書架の中位に「羊たちの沈黙」があった。驚くべきことに、11年前の作品が突然に再びランク入りしたのだ。その奇跡の理由は、待望の続編である本書が出版され、前作を読んでない人達が購入したためである。本書はベストセラー書架の筆頭にあった。羊たちの沈黙の書き出しは、ＦＢＩ見習捜査官のクラリスが戦闘訓練で何回も地に伏す動作をしている最中に、行動科学課、要するに連続殺人事件担当部署の課長から呼び出される

Copyright　©　Enomoto PE Office, all rights reserved.

所から始まる。これが映画版では、早朝のＦＢＩの訓練用アスレチックコースを延々と走るクラリスの姿から始まる。それは若き捜査官がこれから立ち向かうことになる事件の数々を、観客に期待させる映像である。

そして本書では、秋のヴァージニア州立公園を走る。レクター博士の捜査に没頭しながらも、ＦＢＩ内部での自分の立場に悩む日々の休日に、早朝の陽光を背負った木々の茂る丘陵地帯をかろやかに駆ける。その姿を、アメリカに戻って来たレクター博士が、ひそかに遠くから双眼鏡で見つめている。博士はその姿をしっかりと記憶に刻むと、駐車場に向かった。そこで彼女の愛車、マスタングのドアを薄い金属板で開け、皮を巻いたステアリングのクラリスの手が触れる部分を嘗めた。そしてドアのロックを戻し、去った。

射撃の腕も随一のクラリスは、常に戦う戦士であった。孤児の彼女が、自分の人生を切り開くために、ＦＢＩで積極的にトレーニングをこなし、抜群の成果をあげながらも、その実績が、出世主義の男性達に恐れられ、ことごとく評価から外された。

そんなクラリスに、レクター博士は死んだ妹、ミーシャの面影を見た。彼らはリトアニアの貴族の出身で、戦争を経て孤児となった。博士はクラリスに支配欲と共感と、そして醜くも哀しい悪魔の恋心を抱く。闇の世界から、隠れて、卑屈に女神を崇拝する。

所でインテリの連続殺人犯と言えば、どうしても青ひげが連想される。15世紀フランスの元帥ジル･ド･レイである。彼は幼児虐待殺人者であったが、一方当代随一の芸術愛好家であった。早くから学問や古典文学への理解に優れ、ラテン語が堪能であった。イギリスとの戦禍とペストに疲弊していたフランスで、かの救国の聖女ジャンヌ･ダルクを助け、常にかたわらに身を置いていた。真摯に彼女を崇拝していたが、ジャンヌ･ダルクが処刑された後は財力に任せて趣味に取りつかれた生活を送り、さらに錬金術にのめりこんで奥義を極めるために悪魔と契約し、捧げものとしての幼児殺しに血道をあげた。

さて、レクター博士はジルと同じく、彼にとっての聖女である妹のミーシャを失い鬼畜の道に堕ちた。しかし戦う聖女クラリスとめぐり合い、崇拝した。彼はこれからどう生きるのであろうか。

（初稿2001.1.15）

［リバイバル感想］

初稿時には「聖女に跪（ひざまず）く卑しい悪魔」というイメージが、いたく気に入っていたことが分かる。しかし「悪魔は跪きながら、聖女を支配」しようと試みる。悪魔の本心とはそういうものだ。

本シリーズでは、第53話「芥川」（伊勢物語）にその類型があるが、その話はその回に譲ろう。その他の類型としては「オペラ座の怪人」を思い出す。超簡単に要約すれば、パリのオペラ座の地下に棲みついた醜い怪人（実は音楽の天才）が、若いオペラ歌手に恋をして、我がものにしようと行動するが、やがて身を亡ぼす。この舞台となるオペラ座の地下構造が複雑なことは事実らしい。

実はウィーン国立歌劇場（Wiener Staatsoper）の舞台に立ったことがある、合唱の一員にすぎないが。この劇場も部屋が沢山あって複雑だった。準備中に楽屋やリハーサル室を渡り歩

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

く。人について歩いているうちは良いが、ちょっと何かに気を取られてはぐれると、そこは誰も居ない廊下と扉だらけの場所になってしまう。その時にちょっとした恐怖を感じた。これが照明もままならない地下であったら、相当に怖い。でも、そのまま道に迷ったことにして、歌劇場の奥底を探求してみるのも、悪くは無いとも思った。（あ、ちょっと自慢してしまいました。）

(2021.8.08)

ヴィーナー シュターツオーパーのネクタイ

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.